

第5回 小田川付替事業 環境影響評価 技術検討委員会 (議事要旨)

開催日時：平成24年10月19日(金) 14:00～16:00

場 所：倉敷市倉敷労働会館

出席委員：

内田 和子 (元岡山大学大学院 社会文化科学研究科 教授)
奥島 雄一 (倉敷市立自然史博物館 学芸員)
河原 長美 (岡山大学大学院 環境生命科学研究科 教授)
笹岡 英司 (元岡山大学大学院 環境学研究科 教授)
佐藤 國康 (元川崎医科大学 教授)
西垣 誠 (岡山大学大学院 環境生命科学研究科 教授)
波田 善夫 (岡山理科大学 学長)
丸山 健司 (日本野鳥の会 岡山県支部 支部長)

8名中 8名出席

議事要旨：

1. 委員会の成立について

- ・委員会規約第5条の2に基づき、出席者数が8名中8名であることから、委員会が成立していることを確認した。

2. スケジュールについて

- ・小田川付替事業環境影響評価手続きの概略スケジュールについて、事務局から説明があった。

3. 環境影響評価準備書(素案)の概要

- ・環境影響評価に係る予測・評価結果の概要のうち、動物、植物、生態系(上位性、典型性、典型性-移動性)に係る検討結果について、事務局が説明を行い、以下の質疑及び助言がなされた。

【動物について】

委 員：近年の海面上昇に関し、瀬戸内海の潮位も上昇傾向にあると思われるが、塩水遡上等、小田川付替事業に関連して影響は想定されないか。

事務局：河口付近に潮止堰が設置されている。台風や大潮等の際に潮止堰から若干越えている状況はあるが、新合流点付近まで塩水が遡上するようなことは想定されないため、小田川付替事業の影響はないと考えている。

委 員：予測の直接改変以外の影響のうち、地下水の水位の低下に関する記述で、影

響対象が「休耕田等」とあるが、「水田」に依存する生物も多いため、表現を検討してはどうか。

事務局：「休耕田等」の「等」に水田も含めていたが、表現を再考する。

【植物について】

委員：環境保全措置を行う植物のうち、アサザは多年草なので移植後の管理は可能である。一方、ヤナギヌカボ、コゴメカゼクサ及びホソバイヌタデの3種は一年草なので、出水攪乱後に出現する裸地の消長に依存している植物であるため、冠水頻度だけでなく、生育立地が確保されるかを考える必要がある。したがって、冠水頻度の項目の中で、「河川の動的環境（裸地の存在状況）が重要である」ということを加筆してはどうか。

事務局：一年生草本の生育の維持には「動的環境が重要」という点を考慮して、表現を再考する。

委員：アサザが柳井原貯水池で生育しているのは、柳井原貯水池が小田川に比べて貧栄養で、ヒシなど競合する他種が繁茂していないことが条件として考えられる。移植後にメンテナンス・フリーという条件だと、水質をどう維持するかが課題であり、移植先の整備にあたっては、山水、湧水と関連づけられないか、検討してはどうか。

委員：耕作地等からの農業系の栄養塩類の流入が想定されるため、保全箇所のレストラン等に湧水が出てくると、水質が維持しやすいかもしれない。

事務局：ご助言いただいた方向で検討したいと考えている。

委員：生態系の典型性の項目での検討事項かもしれないが、一般種の植物の生育状況の変化によって、昆虫類の重要な種について、食草との関係から影響は想定されないか。

委員：昆虫類の重要な種は、肉食系の種が多く、食物連鎖のより上位に位置するので、環境の影響を受けやすい種が評価対象になりやすくなっている。ただし、中には、植物食の種もいる。例えば、カワラケツメイを食草とするチョウが確認されているが、カワラケツメイは、個別に保護しなければこの地域で消滅してしまうような種か。

委員：個別保護しなくてもまた生育すると考えられる。

委員：それであれば問題ない。昆虫と食草の関係は、全体としては、昆虫類は移動可能なため、改変によって一時的に消滅しても、近隣に同様な環境が確保できれば、回復は可能と考えられる。

【生態系（上位性、典型性、典型性－移動性）】

委員：典型性－移動性で、イノシシ、キツネ、アナグマのうち、イノシシについて

は、平野部まで降りてきているものと考えられるが、何か河川環境に悪影響を及ぼしているか。

事務局：調査している中では特にそういった情報はない。

委員：サギ類の代替のねぐらは、場所はもう決まっているのか。

事務局：付替え河道内で、今後検討する予定である。

委員：サギ類のねぐらは、付近に糞が落下し堆積するものであるため、「迷惑施設」にならないか。

委員：現状では河川敷をねぐらとしており、住宅地に近くないため、臭いや糞という被害は聞いていない。代替のねぐらも同様に住宅地近傍でなければ問題ないと考えられる。

委員：サギ類の代替のねぐら、タヌキ、キツネ等の移動経路など、動物はそういった新たな場所や経路を見つける「知恵」を持っていると考えて良いのか。

事務局：「知恵」はあると考えている。例えば、ダム事業において、元々移動経路があった付近で、付替道路の下にボックス・カルバートを設置すると、そこを通るようになったという例がある。

委員：堤防の形状や構造は、景観面の検討対象かもしれないが、生態系の面からも検討すべきではないか。コンクリート製などの構造は決まっているか。

事務局：構造は概略しか決まっていないが、多自然川づくりの河川整備を進めたいと考えている。例えば、緩勾配の堤防としたり、護岸に覆土を行うこと等の配慮も考えられる。

委員：冠水頻度の件について、他の事例から冠水頻度が下がってもオギ草地の維持は問題ないと思うが、むしろ樹林化が心配されるため、「樹林化」に関する記述を追加してはどうか。

事務局：表現を再考する。

委員：柳井原貯水池の止水域が河川環境へ変化することについては、止水環境がなくなるという前提はあるが、池底が深く外来種が優占するような環境から、水深が浅く多様な魚種が生息可能な環境となる。「生態系として多様になり良くなる」という評価もあるのではないか。

委員：水質面では、流水系になることにより、窒素・リンの濃度が下がるわけではないが、藻類等が流水による鉛直混合により、河床材料の間隙等に捕捉・除去され、アオコの発生が少なくなると思われる。

【まとめ】

委員長：環境影響評価の動物・植物・生態系の予測・評価の結果の概要を確認の上、委員会の指摘事項を踏まえ、この結論により準備書を作成していくということで了承されるか。

委員：了承する。

【その他】

事務局：瀬戸内海の海面上昇の影響のご確認については、現在どの程度の頻度で潮止堰を越えているか等の情報を整理し、委員へ報告する。

植物の予測結果については、冠水頻度の視点に加えて裸地（動的環境）の変化についても表現を追加したいと考えている。

次回の委員会は、評価書の作成に向けた審議をお願いしたいと考えている。

以 上